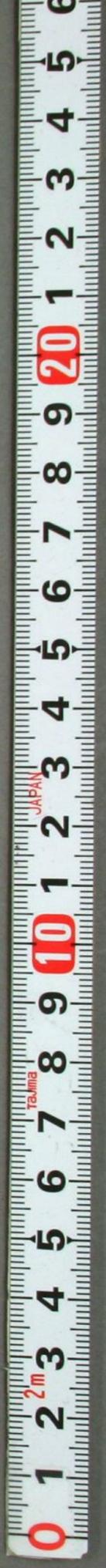


下
墨

玉
乃
枝

卷

13
1455
2



門へ達 13 冊
番 1455
巻 2

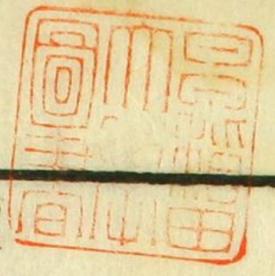
燈下戲墨玉之校卷二

東都 森羅子 著

○小夜夜

去ば清女が筆すさふみ。遠くそ近きとのハ男女乃
たりと。後み千古の確言たるか。紅紫よ詩を類し
る。深溝のあふあがりたり。あふ男れもにつあふく。
逐み妹脊のちぎらふ。依ほたうといふ見ぬ。唐土れ故事。孤
虚言なりといひ。いふらん。ち。魚虫のまざらん。男の僻云。故也。
出雲の神れ縁ささめ。鹿島神社。常陸。若月。下老人の

田舎



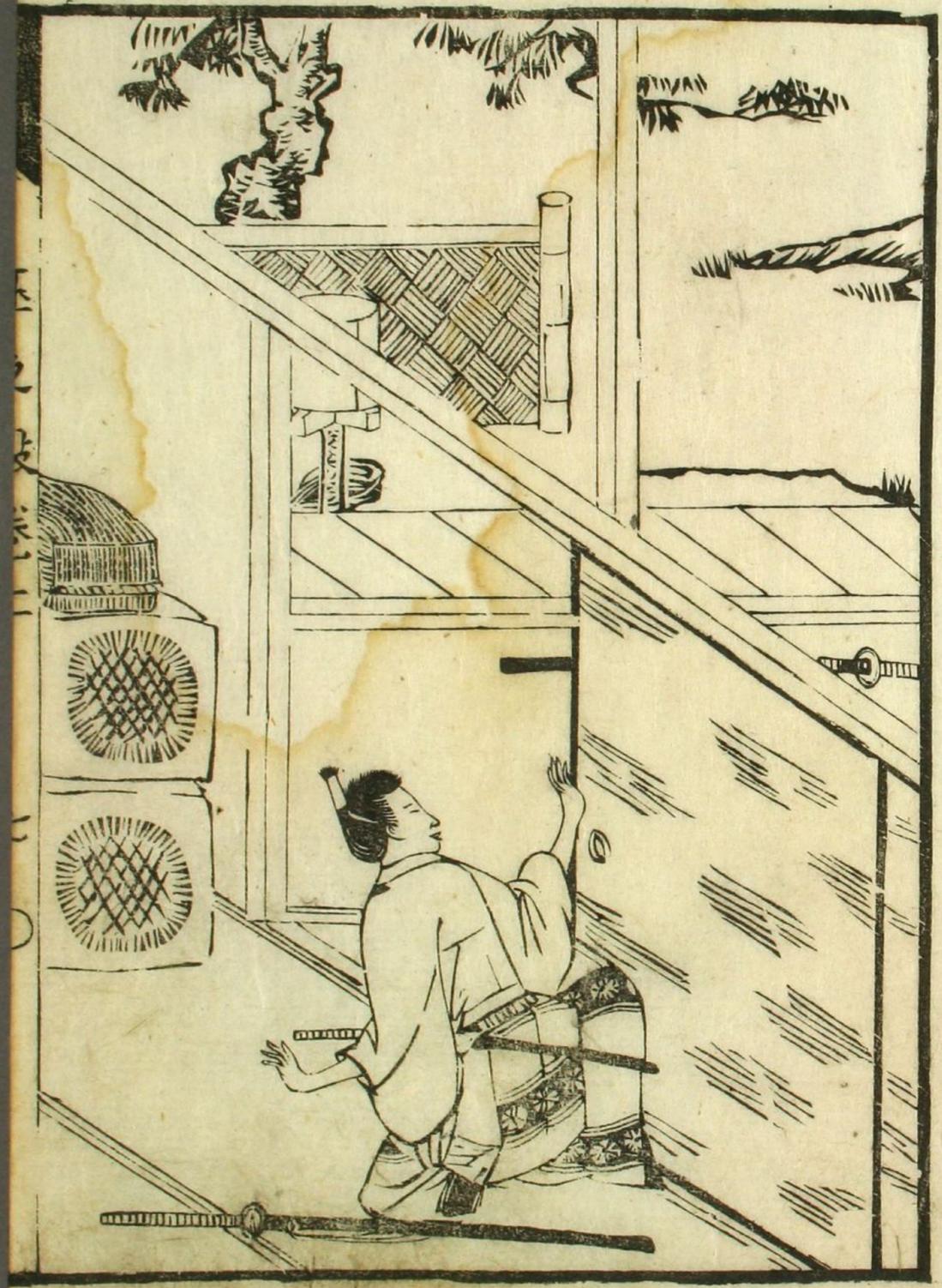
玉之枝巻二

盗賊の術せむに手術なりと。一日三秋れはひ
みく。待て我れもひさしけし。漸み初夜もまだ。二更
の鐘み狗と候き。天にうづまる。比み抜只して。死
れ紫折戸に手をさゆれば。素よりと虚後なり。れは
みあさうひて。海くはを。室納うましく。狗あま
深雪か深情かく。海で坊。それあり。体感し。めと
勝手の能く。小短したの戸尻を明せ。うくと
あひ入り。何と中ん心を。ゆえんとす。あみ思は
む。あわく。胸と出んと。はる。足り。に。盤れあり。た
あ。は。漸。津。と。と。候。あ。は。あ。く。期。く。あ。る。差

黨ともす。盗賊を。入た。な。れ。と。げ。う。く。と。物。り。合。有
は。は。つ。ら。さ。は。打。擲。く。あ。く。繩。を。り。つ。て。高。小。手。細。け
と。い。右。島。若。痛。み。堪。え。ぬ。人。く。柳。示。せ。れ。あ。我。を。盗
賊。の。中。と。い。み。あ。く。は。繩。目。を。ゆ。り。勢。と。さ。け。び。え。ん。は。格
肉。つ。あ。う。ま。づ。あ。う。り。を。照。して。あ。あ。つ。が。顔。を。見。よ。と。瞞
燭。体。り。ち。出。右。島。が。面。筋。を。見。よ。め。と。あ。は。後。ま。た。あ
顔。を。み。く。あ。の。う。に。お。ま。い。向。ひ。の。人。よ。あ。う。ま。や。今。宵
と。君。大。海。右。島。の。首。守。を。う。わ。ひ。あ。び。入。う。家。を。不。意
に。あ。つ。た。ぬ。さ。れ。あ。れ。が。穩。便。み。を。う。ひ。た。れ。と。殿。の。侍
さ。う。あ。れ。う。ら。ん。う。さ。う。に。見。通。し。が。は。危。房。う。ち。あ。る

突情成演。いさだよく死ぬはく極しと元朝をまらぬ。
源君をさしおぼたふとめよ。与二が熱書致興え。
高とのくろゑよと袂紗を扱たり事まをばまびうらに
かづり。ちぐめよりうら係けならんと存せしうと。若も
や此来突情ならう。一夜のあけみ百とせれ命を失ふ
とと一殿ふまごと後娘とも無び入し。身の煩惱のたひ
もおとほし。涙まき此をうらみあつれと玉りじと。
潜物みぢみぢみあづるれが。源君のたをうられ執んば
ちぐめく愛き。傷しくらあつても。むよおとあつて。控内み
むらひ。此二品ののちせれた其方も定めく。足知あつん殿

の筆れぬまゆぢれおたれば。例のつか業にお遠なり。
たをれば此のあひや成終き。くしまいりせむいには。
控内一糸ぞんせにまをを女性のおもごめ終き。はを
うらひと申はものなり。せひとと殿の清くつてまをば
お免おんととををれば。源君のうらな智者あつ。みづ
かづかあつら成りらひあひ其の方あつ。はなありといへば。
控内居づけたらみなり。あつらめらじ。きまををねりかお
うか柔かちらとらけたぬらんといへば。これづよ。おぼろ
後の清内あつ。長といつら。其の方清むち成あづら
がら。花室の切戸み後もあつら。此間のあつ。よ。謎



五之巻二

かんととえはあつて。たうどのいふよりかたむしとぞ。まは
ち此母とれ一件を。半く袖と外かみ出せ。縁えりは其のひは。深
ゆた今も母のひみせあり。血を志ありて。あを志あり。白
うねの叙ゆきみむきび付つちうらを。まゝめく。室ゆたが亭てんを
庭ちかさたふあげ。まゝや。物ともあちらふ肉。大泳おほたがすん
ゆた同まぢうく。まゝえ。たれが。ちの後の鬼おにれ。あう。縁えりく。己
か外かみ入いみけ。深ふかき。が。ち。ち。通とど。きん。室むろの。退たい居い
の。あ。う。ら。に。な。く。な。ま。た。ち。つ。ぐ。ま。あ。す。ま。あ。り。ゆ。き
や。叙ゆきみ。は。い。つ。ま。あ。り。の。あ。う。ま。り。あ。げ。ま。れ。が。深ふかき。ゆ。た。が。血ちを。以
て。書かた。ふ。あ。り。つ。ま。ゆ。み。ゆ。み。ひ。と。か。り。ゆ。た。の。ひ。れ。け

を。か。み。た。ち。が。う。く。ま。う。り。に。う。た。へ。ま。ま。志こころの。び。あ。り。ん。と
づ。ひ。を。け。ぬ。む。う。の。小。書こ。う。ま。あ。見み。あ。つ。り。の。み。懲こらへ。く。た
た。ふ。を。あ。と。ち。う。ん。り。ふ。ご。と。く。ま。い。ら。れ。み。ま。の。知し。ゆ。ま
行ゆち。あ。り。れ。み。怒い。り。此。経きやう。口くち。と。に。ま。く。大おほの。袖そで。ち。う。く。た。あ
も。え。ま。ま。上うへ。は。も。飽あ。き。う。げ。て。ま。あ。深ふかき。書か。た。あ。げ。こ
み。あ。う。び。ま。ち。を。あ。う。ん。と。た。く。む。て。終ま。の。怪あや。な。れ。と。其
ま。大。泳おほ。た。が。室むろ。あ。ち。ら。え。定さだ。は。う。ま。對たい。て。ま。や。う
ゆ。た。が。え。ま。う。と。清きよ。色いろ。と。仇あや。な。し。ま。に。れ。ま。あ。り。ゆ。あ。つ。て
又また。ゆ。た。も。あ。う。ら。ま。づ。う。ま。ん。と。ま。せ。ま。あ。や。返へん。着たく。ま
よ。ん。と。た。り。た。努つと。め。と。深ふかき。ゆ。た。を。う。ら。後あと。げ。借か。を。た。れ。が。定

貫大ぬききやうてんー先夜の事い恙堂ととが一洲の
我奥よりとせらうて。和後をうらう先たり今日れ事よ
あわらういさかおもあひまらばとらば。ちりあうらうて。か
めんさーと血みと衣投以じ。此二ーか見えりあはじと
し。バ。定貫めんごをうらう先相と後さ。扱ふんれぬ
を懐うらうと教あうと土のぶとかり来れとくぬり。
齒咬喰さうり身を慄り二ふ成川つらと重初みら
目とうけと。扱くれ回かけ入ーが。おちあくの物言女の
すくあまふにとあぶとく。まゆとび。重初さてつとた先
らふ内。定はら羅刹のあはるあぶとく。扱後踏もて

あゆみ出控肉を喰出ー。あらん除言めがぬあまひ。
甚多にさうとれがじ。神されれ小百合の長が。ゆと扱
り。身の代ふ百重れ内あははるの分をあうてえ。
昂日残重を取たて来れ女めあんたふおらふん花
雲れ切たよう出ーかりた。とやうと急げと追立や。と
扱取る衣をうらうげと。ち昂みむうひ。今日のぬのぬは
の女めが不為なるゆと。今今いとぬををりた。足下
みと云うらあふま。とら。重行心サカをりて割
かぶと。悔のハふびらあれも。今さうわうぬ事
たれたあうぬ俵よたのぶを正し。期明白ふれしひ

玉之支巻二

五ノ上ハ申分いさいさか色は是なり中を毎代一より多く持つ
ゆりまふ。

燈下戲墨玉之枝卷二

